

同性友人関係における状況に応じた切替の生涯発達

－中学生から高齢者を対象とした横断調査－

Life Span Development of the Situational Changeovers in Relations with Congeneric Friends
－ Cross Sectional Survey from Junior High School Students to Elder Persons －

大谷 宗啓
Munehiro OHTANI
滋賀大学教育・学生支援機構

渡部 雅之
Masayuki WATANABE
滋賀大学教育学部

若松 養亮
Yosuke WAKAMATSU
滋賀大学教育学部

<キーワード> 状況に応じた切替 選択的關係 希薄な関係 生涯発達 友人関係

Key Words: situational changeovers, selective relations, superficial relations, life span development, friendship relations.

問題と目的

青年期の友人関係は同一性形成に重要な役割を果たし (Waterman, 1993), その後の恋愛関係等の対人関係の準備としての役割を果たす (宮下, 1995)。即ち, その時点の適応のみならず発達的に重要な活動である。国内では, 現代青年の特徴を友人関係の希薄化から論じた「希薄化論」が 1980 年代後半に登場し (岡田, 2016), それを批判する形で, 時代変化への合理的適応だとした「選択化論」が 1990 年代末に登場することで (辻, 2016), 青年期の友人関係を主題とする研究が爆発的に増加した。希薄化論は, 疎隔的, 部分的, 表面的で円滑な関係を求める傾向の高まりを指摘するもので, 当初それは発達の遅滞と解釈された (e.g. 岡田, 1992)。選択化論は希薄化論と同じ特徴に注目した上で, 高まっているのは希薄さではなく, 状況や気分に応じて複数の相手・複数の自己を使い分ける柔軟さであり, 自我構造や親密性の新しい形であると解釈した (浅野, 2015)。この対立ないし相対化は, 学生相談・生徒指導を背景とした希薄化論が不適応的な面に着眼したのに対して, 若者文化研究を背景とした選択化論は適応的な面に着眼したためと考えられる。同じ特徴を異なる着眼点から捉えたものであれば両論を止揚することでよりよい理解がもたられる。

希薄化論と選択化論が注目した特徴は 1930 年代以降繰り返し指摘されて来たものであるが (大谷, 2019), 希薄化論と選択化論は現代青年論 (現代若者論) として登場したことに注意が必要である。希薄化論と選択化論は共に, 注目した特徴を, 友人関係の普遍的な特徴としてではなく, あるいは現代人の特徴としてでもなく, 現代青年 (現代若者) の特徴と限定したのである。そのように限定するには時代性・世代性の検討のみでなく, 青年期以外の発達段階との共通点と差異を踏まえた生涯発達の観点からの検討が必要であるが, それはほとんど論じられてこなかった。

その背景には, 友人関係研究のほとんどが児童期と青年期を対象に行われ (本田, 2018), 成人期以降を対象としたデータは極めて少ない (丹野, 2019) という現状がある。発達差の吟味にはコホート研究が必要であるが, まずはその土台となる横断比較研究にも欠けるのである。国外では成人期を対象とした研究も行われてきたが (Hartup & Stevens, 1997), 学校文化, 雇用環境, 人口流動性等の違いを踏まえれば, 国外の研究知見をそのまま適用することはできない。したがって, 青年期の友人関係は発達的に重要であると強調される一方で, それを生涯発達の中に位置づけるための知見に欠けるという深刻な限界を我が国の友人関係研究は抱えてきた。この限界は適切な青年理解を阻害し支援策を誤らせる危険を伴うため, 学術上のみならず教育実践のためにも, 限界克服が喫緊の課題である。

この課題に取り組むにあたり, 本研究は, 状況に応じた切替 (大谷, 2007) に着目した。状況に応じた切替とは, 友人関係において状況に応じて関係対象や自己のあり方を切り替えることであり, 関係対象を切り替える「対象切替」(項目例「どこに何をしに行くかによって, 最初に誘う友人は違う」) と, 自己のあり方を切り替える「自己切替」(項目例「どんな友人と一緒にいるかによって, 自分のキャラが変わる」) の 2 下位概念から定義される (大谷, 2013)。状況に応じた切替を切り口とする利点は以下 3 点である。

第 1 に, 状況に応じた切替は, 希薄化論と選択化論が共通して注目した特徴に焦点を置き, 適応・不適応および時代性・世代性のアプリアリな仮定を排して捉えたものである (大谷, 2013)。そのため, 希薄化論と選択化論の双方が蓄積してきた知見との接続, および再検討に適している。

第 2 に, 青年期から老年期にわたる国内の横断調査が 2001 年と 2011 年に実施され (岩田, 2014), その結果は年齢要因の影響を示すものであったが (岩田, 2014), 時代性・世代性の観点からの解釈に終始してい

る。また、同じ行動でも異なる意味をもつ可能性が指摘されているが(岩田, 2006), 行動の背後にある心理的機序は取り上げられていない。対人志向性ではなく対人行動として捉える状況に応じた切替は心理的機序の検討に適しており, 先行研究の限界を補完することができる。

第3に, 状況に応じた切替, とりわけ自己切替は, 青年にとっては抵抗感のある行動であり, 現時点では効果的ではなく周囲から期待もされていないが, 成人後(入職後)の適応に必要とされる行動であると考えて前倒しで実行されている可能性が, 大学生対象の面接調査によって示され(大谷, 2019), 大学生および高齢者対象の生涯展望調査によっても追認されている(大谷, 2020)。生涯展望調査における変化は岩田(2014)と概ね軌を一にすると同時に, 発達遅滞よりもむしろ, 早熟を急かされたために発達の歪みを抱え込む心理社会的早熟の問題(Elkind, 2001; 鱸, 1986)を危惧させる結果であった。したがって状況に応じた切替を切り口とすることによって, 友人関係において青年が直面している発達上の問題を捉えることができるであろう。

そこで本研究は, 青年前期から老年期に亙る横断調査を実施し, 青年期の友人関係を生涯発達の中に位置づけることを試みる。具体的な目的として, 第1に, 状況に応じた切替を実行している程度(以下, 実行認知とする)の年齢区分差を検討する。年齢区分は, 中高生(青年前期), 大学生(青年後期), 30代(成人期), 40代(成人期), 50代(成人期), 60代以上(老年期)の6水準に区分する¹。状況に応じた切替が, 仮に希薄化論が論じるように発達遅滞の表れであるならば, 実行認知は児童期をピークに以降漸減するはずである。したがって中高生以降を対象とした今回の調査では, 年齢区分を追うごとに漸減すると思われる(仮説1-A)。一方, 仮に選択化論のように発達差を捨象し時代性・世代性の観点からのみ解釈し得るならば², 友人関係の変容が起こったと希薄化論・選択化論が指摘した1980年代後半当時の青年にあたる50代前後の年齢区分間の差が大きく, 他の年齢区分間に顕著な差はみられないと考えられる(仮説1-B)。そして, 上記のいずれにもあてはまらず, 且つ年齢区分間の差がみられるならば, 成人期移行を含む生涯発達の観点からの検討が有意義であると考えられる(仮説1-C)。

第2に, 状況に応じた切替の背後にある心理的機序とその年齢区分差を検討する。心理的機序は, 前述の実行認知に加え, 実行したくない程度(以下, 抵抗感とする³), 付き合いの役に立つと思う程度(以下, 効用認知とする), 周囲から実行を期待されていると思う程度(以下, 期待認知とする)の4指標で測定する。この4指標の内, 状況に応じた切替を実行している程度そのものを扱う実行認知以外の3指標は, 大谷(2019)の面接調査において青年学生と成人学生の間で評価が分かれた特徴である。また社会的情報処理モデル改訂版(Crick, & Dodge, 1994)に照らせば, 期待認知は手がかりの

解釈と目標の明確化, 効用認知は反応決定における結果期待にあたる。抵抗感の低さは個人特性との親和性を反映するとすれば, これらがよく統合しているほど, 個体と環境の関数としての適応(福島, 1989)に有利という合理性をもつと考えられる。そこで, 仮に状況に応じた切替が合理性をもつ場合には, 期待認知の高さが効用認知の高さを伴い, 抵抗感の低さを伴い, 実行認知の高さを伴うという関係性⁴がみられると仮定した。また, 状況に応じた切替の合理性が低い場合には, そうした緊密な関係性はみられず, 各指標が個々に実行認知と関係すると仮定した。以上を検討するための仮説モデルをFigure 1に示す。

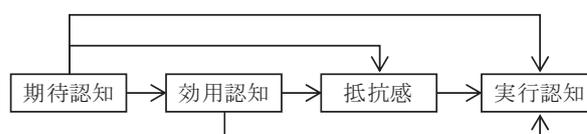


Figure 1 心理的機序の仮説モデル

仮に状況に応じた切替が成人期に必要とされる行動であり, 適応に有利であるという合理性をもつならば, 成人回答者に限れば, 仮説モデル中央の直線的な流れのパスが全て有意であると考えられる(仮説2)。また, 青年では抵抗感を伴っても実行されているのであれば, 青年回答者に限れば, 抵抗感から実行認知へのパスは正負で相殺され, 仮説モデル中央の直線的な流れは寸断されると考えられる(仮説3)。

方 法

調査の手続き

2020年1月, 講義時間の一部を用いた質問紙調査を関西地方の国立大学生194名に実施し187名の回答を得た。所要時間は約10分間であった。また同年1月から3月, 関西地方の幼稚園児・小中学校生徒・大学生を介してその家族に質問紙・依頼文書・返信用封筒のセットを1,543名配布し, 526名の回答を得た。更に同年2月から3月, 留置法による質問紙調査を関西地方のシルバー人材センターで実施し90名の回答を得た。以上803名の内, 回答に不備のあるもの, 19歳から29歳の大学生以外と25歳以上の大学生⁵の計40名を除く763名を有効回答票とし, 年齢区分毎の人数を揃えるため乱数生成によって層化抽出した6区分, 各49名の計294名を分析対象とした(Table 1)。

調査内容

年齢, 学校種等の属性の他, 下記の内容を尋ねた。

対象切替 「同性の友人たちとの日頃の付き合いの中で, 一緒に行動したり話したりする相手を切り替えていることはありますか(例: どこに何をしに行くかによって, 最初に誘う友人は違う)。また, そのような切り替えについて, どう感じておられますか」と尋ね, 「相手

Table 1 年齢区分と性別の人数と平均年齢

全有効回答					
区分	男性	女性	他	計	平均年齢 (SD)
中高生	20	28	1	49	15.10 (1.82)
大学生	92	93	1	186	19.28 (0.89)
30代	16	93	0	109	36.14 (2.34)
40代	51	203	2	256	44.03 (2.85)
50代	29	37	0	66	52.76 (2.54)
60代以上	57	40	0	97	68.80 (4.74)
計	265	494	4	763	38.92 (16.67)

分析対象 ^a					
区分	男性	女性	他	計	平均年齢 (SD)
中高生	20	28	1	49	15.10 (1.82)
大学生	24	25	0	49	19.16 (0.77)
30代	8	41	0	49	36.10 (2.59)
40代	11	38	0	49	44.29 (2.63)
50代	18	31	0	49	52.82 (2.66)
60代以上	28	21	0	49	68.27 (4.69)
計	109	184	1	294	39.29 (18.71)

^a 年齢6区分, 各49名ずつを乱数生成によって抽出した。

を切り替えていると思う」(実行認知), 「できれば相手を切り替えたくないと思う」(抵抗感), 「相手を切り替えれば, 付き合いの役に立つと思う」(効用認知), 「相手を切り替えることを周囲から期待されていると思う」(期待認知)の4問に, 「1. あてはまらない, 「2. どちらかと言えばあてはまらない, 「3. どちらかと言えばあてはまる, 「4. あてはまる」の4件法で回答を求めた。

自己切替 「同性の友人たちとの日頃の付き合いの中で, あなた自身の『キャラ』(キャラクター, 性格)を切り替えていることはありますか(例: どんな友人と一緒にいるかによって, 自分のキャラが変わる)。また, そのような切り替えについて, どう感じておられますか」と尋ね, 対象切替で用いた設問文中の「相手」を「キャラ」に替えた4問に, 「1. あてはまらない, 「2. どちらかと言えばあてはまらない, 「3. どちらかと言えばあてはまる, 「4. あてはまる」の4件法で回答を求めた。

倫理的配慮・使用した統計パッケージ

調査は無記名で行い, 個人は特定されないこと, 回答

は任意であり途中放棄も可能であること, 回答結果は適切に処理されること, 国立大学法人滋賀大学研究倫理委員会の許可を得た調査(承認番号: B190514)であること, および研究チームの連絡先を明示し, 調査協力への同意を得られた個票のみを分析に用いた。分析にはHAD17.101 ソルバーオン(清水, 2016), およびG*Power3.1.9.2 (Faul, Erdfelder, Lang, & Buchner, 2007)を用いた。

結 果

各指標値の平均と標準偏差

対象切替の実行認知, 抵抗感, 効用認知, 期待認知の平均値(SD)は順に, 2.83 (1.09), 2.29 (1.12), 2.72 (1.04), 1.79 (0.85)であり, 自己切替の実行認知, 抵抗感, 効用認知, 期待認知の平均値(SD)は順に, 2.46 (1.04), 2.80 (1.04), 2.80 (1.00), 1.71 (0.84)であった。

各指標値の年齢区分差

対象切替 対象切替4指標を従属変数とし, 回答者の年齢区分を要因とした1要因分散分析を行った。その結果と年齢区分別の平均値をTable 2とFigure 2に示す。抵抗感に対する主効果が有意であり, Holm法による多重比較(以下, 群間差の検定方法は全て同じ)の結果, 40代よりも60代の平均値が高かった。また, 効用認知に対する主効果が有意であり, 60代以上よりも30代の平均値が高かった。

自己切替 前項と同様の分析を自己切替について行った結果と年齢区分別の平均値を前掲Table 2とFigure 3に示す。実行認知に対する主効果が有意であり, 中高生・40代・50代・60代以上よりも大学生の平均値が高かった。また, 効用認知に対する主効果が有意であり, 50代よりも大学生の平均値が高く, 60代以上よりも中高生・大学生・30代・40代の平均値が高かった。加えて, 期待認知に対する主効果が有意であり, 中高生・40代・60代よりも大学生の平均値が高かった。

心理的機序の年齢区分差

対象切替 前掲Figure 1の仮説モデルを基に構造方

Table 2 年齢区分を要因とし対象切替4指標と自己切替4指標を従属変数とした1要因分散分析 (n = 294)

従属変数	F値	(df)	ES:f	1-β	多重比較 (Holm法)
対象切替実行認知	1.97 †	(5,288)	.19	.67	(全てns)
〃 抵抗感	2.58 *	(5,288)	.21	.80	40代<60代以上
〃 効用認知	2.26 *	(5,288)	.20	.74	60代以上<30代
〃 期待認知	0.31	(5,288)	.07	.13	
自己切替実行認知	4.72 ***	(5,288)	.29	.98	中高生・40代・50代・60代以上<大学生
〃 抵抗感	0.70	(5,288)	.11	.26	
〃 効用認知	7.33 ***	(5,288)	.36	.99	50代<大学生, 60代以上<中高生・大学生・30代・40代
〃 期待認知	3.40 **	(5,288)	.24	.91	中高生・40代・60代<大学生

注) 多重比較の群間差は5%水準で有意なものを示した。

*** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$ † $p<.10$

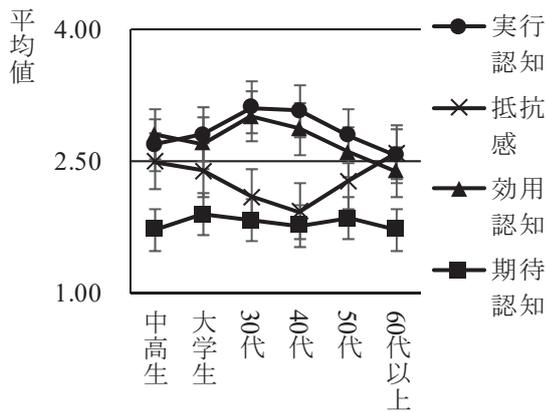


Figure 2 年齢区別にみた対象切替 4 指標

注) エラーバーは 95%CI を示す。

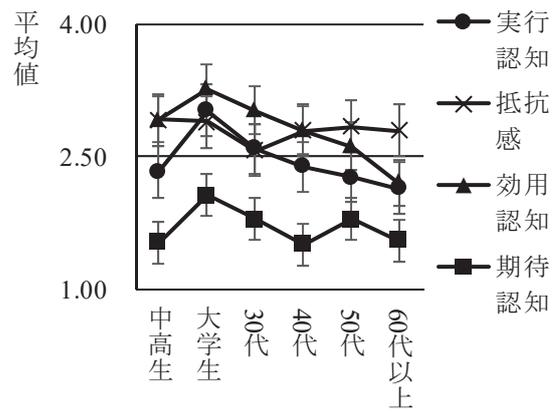


Figure 3 年齢区別にみた自己切替 4 指標

注) エラーバーは 95%CI を示す。

程式モデリングによるパス解析を行ったところ、期待認知から抵抗感へのパスが全年齢区分で有意ではなかった。そのため当該のパスを削除した上で多母集団同時分析を行った (Figure 4)。実行認知への説明力は各年齢区分において大きな値を示したが、大学生に限り中程度の大きさ (Cohen, 1992) にとどまった。この結果は、対象切替の期待認知・効用認知・抵抗感の高低は、対象切替の実行認知の高低をよく説明するが、大学生では説明力が落ちることを示す。有意となったパスに注目すると、成人期にあたる年齢区分では各指標間がよく統合されていること、青年期・老年期にあたる年齢区分では各指標間の統合が弱く実行認知と個々に関連することが読

み取れる。但し 40代・50代と比べて 30代では各指標間の統合が相対的に弱く、30代と 40代・50代の間で節目の存在がうかがえた。なお、直接効果・間接効果の解釈に影響する単相関係数はみられなかった (以下も同じ)。

自己切替 前掲 Figure 1 の仮説モデルを基に構造方程式モデリングによるパス解析を行ったところ、全年齢区分で有意ではないパスはなかった。そのため仮説モデルによる多母集団同時分析を行った (Figure 5)。実行認知への説明力は全ての年齢区分において大きな値を示し、自己切替の期待認知・効用認知・抵抗感の高低は、自己切替の実行認知の高低をよく説明することを示す。

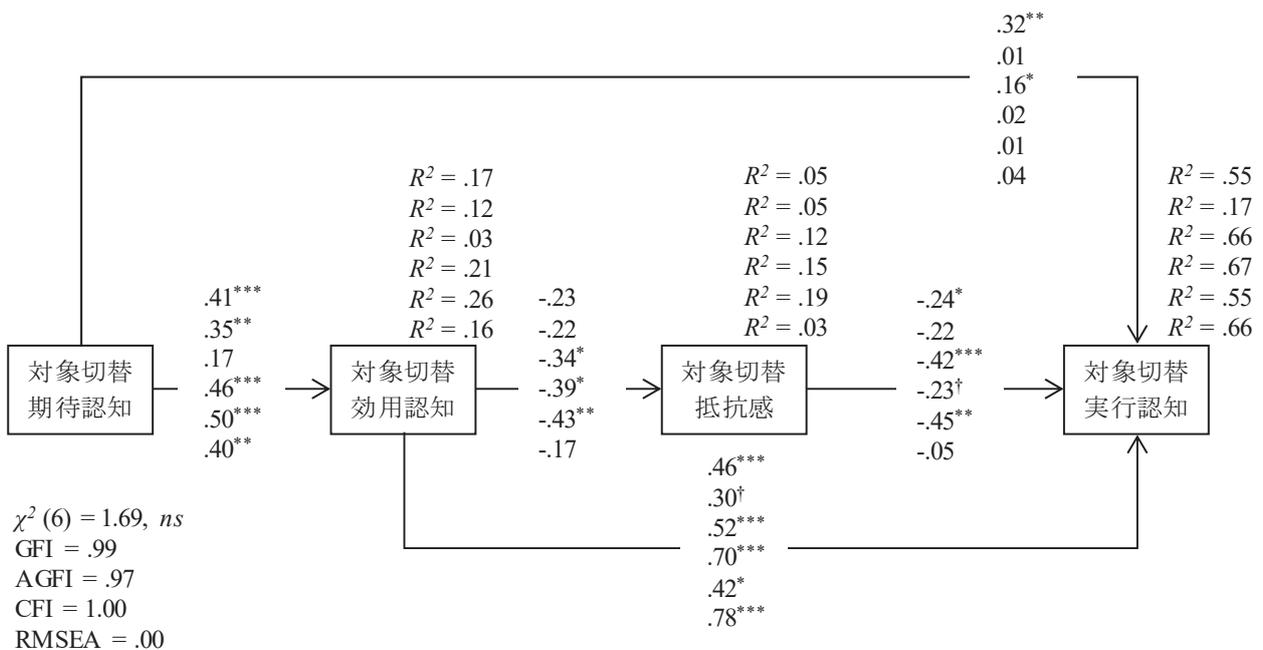


Figure 4 対象切替の多母集団同時分析 (n = 294)

注 1) パス上の数値は上段から順に、中高生、大学生、30代、40代、50代、60代以上の標準化係数を示す。

注 2) 重決定係数 R^2 は上段から順に、中高生、大学生、30代、40代、50代、60代以上の値を示す。

注 3) 誤差項の図示は省略した。

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .10$

有意となったパスに注目すると、対象切替とほぼ同様の結果が読み取れる。但し自己切替においては、30代と40代・50代の間ではなく、30代・40代と50代との間に節目の存在がうかがえた。

考 察

本研究の成果

本研究の目的は、従来、生涯発達の観点からの検討なしに「現代青年の友人関係」とされてきた対人行動を、生涯発達の中に位置づけることであった。

対象切替4指標の年齢区分差、および自己切替4指標の年齢区分差では、いずれも仮説1-A・1-Bではなく1-Cが支持された。以上の結果は、青年期の友人関係の特徴を児童期の遅滞とみなしたり、発達差を捨象し時代性・世代性の観点からのみ解釈したりするのではなく、成人期移行を含む生涯発達の観点から検討する必要があることを示している。

一方で年齢区分差のみられなかった特徴として、対象切替の実行認知が一貫して理論的中間点を上回り、期待認知が一貫して理論的中間点を下回った。また、自己切替の抵抗感が一貫して理論的中間点を上回った。これらの特徴については、発達段階も世代も問わない普遍性を持つのかも知れない。

対象切替における心理的機序の年齢区分差では、成人期に係る仮説2が40代・50代で、青年期に係る仮説

3が大学生で支持された。自己切替における心理的機序の年齢区分差では、成人期に係る仮説2が30代・40代で、青年期に係る仮説3が中高生・大学生で支持された。これらの結果は総じて仮説2・3を支持するものであり、行動としては同じであっても、その心理的機序は発達段階によって異なることを示している。

なお、対象切替では30代で期待認知から効用認知へのパスが有意ではなく仮説2が、中高生で抵抗感から実行認知への負のパスが有意であり仮説3の一部が支持されず、自己切替では50代で効用認知から抵抗感へのパスが有意ではなく仮説2が支持されなかった。これらの結果は、対象切替は成人期の比較的遅い時期に、自己切替は成人期の比較的早い時期において合理性を持つことを示すと考えられる。

以上、本研究の結果は、生涯発達の観点からの検討の蓄積に欠けたまま、現代青年論（現代若者論）に依拠して発展した従来の友人関係研究の危うさと、生涯発達の観点からの検討の意義を示すものであった。

以下、Erikson (1982) に倣い、老年期から青年期に向けて遡る形で、青年期の友人関係における状況に応じた切替を生涯発達の中に位置づけることを試みる。

老年期

対象切替効用認知・自己切替効用認知が低く、対象切替抵抗感が高い。対象切替効用認知・自己切替効用認知が理論的中間点を下回ったのは老年期のみであり、対象切替抵抗感が理論的中間点を上回ったのも老年期のみで

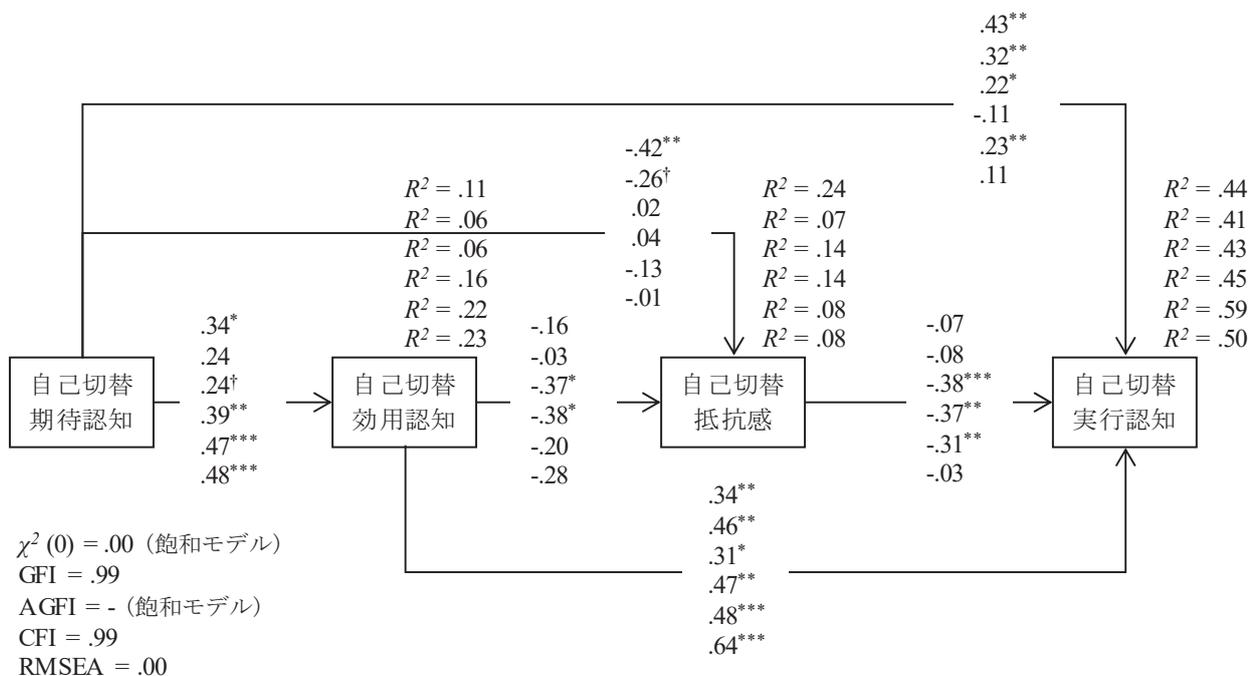


Figure 5 自己切替の多母集団同時分析 (n = 294)

注1) パス上の数値は上段から順に、中高生、大学生、30代、40代、50代、60代以上の標準化係数を示す。

注2) 重決定係数 R^2 は上段から順に、中高生、大学生、30代、40代、50代、60代以上の値を示す。

注3) 誤差項の図示は省略した。

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .10$

あった。国外の研究では、未来展望が限定される高齢者は、自己概念の形成・管理や情報探索よりも情動制御に動機づけられるため、情緒的な報酬をもたらす既知の友人を選好し、ネットワークサイズを縮小することが知られている (Carstensen, 1995; Lang & Carstensen, 2002)。そのため、成人期以前と比べて対象切替・自己切替が効用をもつ場面が少ないのであろう。但し、期待認知が高い場合には効用認知の高さを伴い、抵抗感の高さにも関わらず切替を実行するようである⁶。老年期には、別のやり方を試すには時間が足りないという絶望と向き合いながら、1 回限りの人生を受容し統合することが求められる (Erikson, 1959, 1982)。彼らにとって友人関係とは、友人の期待に応え、受容されている自己を確認する機会なのだと考えられる。そしてそれは、友人関係の深い構造である互惠性 (Hartup & Stevens, 1997) によく合致している。

成人期

対象切替効用認知・自己切替効用認知が高く、対象切替抵抗感が低い。対象切替効用認知は 30 代・40 代頃が全体のピークである。また対象切替抵抗感は 40 代で床効果が推認されるほどに低い。一方で自己切替効用認知はまだ高い水準にあるものの低下基調にある。成人期では一部を除き、仮説 2 の通り、仮説モデル中央の直線的な流れのパスが全て有意であった。彼らは、期待を認知した場合に効用認知を高め、抵抗感を低減し、切替を実行するのだと考えられる。これは成人期においては状況に応じた切替が、合理的かつ主体的に用いられていること、成人期に適合的な行動であることを示している。

青年後期

自己切替実行認知・自己切替効用認知が高い。いずれも大学生・30 代頃が全体のピークである。自己切替期待認知も他の発達段階に比べて最も高いが理論的中間点を下回る。青年後期の大きな特徴として、仮説 3 の通り、抵抗感から実行認知へのパスが有意ではなく、仮説モデル中央の直線的な流れが寸断されたことが挙げられる。抵抗感の高低が実行認知の高低を説明しないのは老年期と同じである。しかし老年期では期待認知から効用認知を経由して実行認知に至るパスの説明力が強いという明解な機序がみられたのに対して、青年後期の対象切替では弱い間接効果にとどまり、他には直接効果も間接効果もみられず、明解な機序は読み取れない。この結果は、青年にとって現時点では効果的ではなく周囲から期待もされていないが、成人期に必要な行動であると考えて前倒しで実行されている可能性 (大谷, 2019) によって解釈可能と考えられる。彼らにとって友人関係が、成人期移行を意識した試行錯誤の機会となっており、友人との親密化・関係維持よりも優先度が高いために、現時点での期待認知・効用認知を測定した指標の説明力が低減すると仮定できる。青年はインデンティティの問題に追われ、成人に比べ相手に振り向けられるエネルギーが少ないこと (大野, 2010)⁷ もこの仮定を補強しよう。

一方で自己切替においては、期待認知から実行認知へのパスと、効用認知から実行認知へのパスのみ有意という明解さがみられた。青年後期では抵抗感の高低に関わらず、期待認知あるいは効用認知の高低に応じて自己切替が実行されるのだと考えられる。それは、期待認知と効用認知が結びつく老年期からは場当たりの見え、4 指標全てが結びつく成人期からは主体性に欠けるように見えるであろう。

青年前期

自己切替実行認知が低く、自己切替効用認知が高い。自己切替実行認知は理論的中間点を下回る。対象切替においては抵抗感から実行認知へのパスが有意であり、抵抗感の高さが実行認知の低さを伴うことが示された。但し成人期とは異なり、期待認知とも効用認知とも関連しない、漠然とした抵抗感であると考えられる。期待認知から効用認知を経由して実行認知に至るパスは老年期でみられたものと共通だが、老年期とは異なり、期待認知から実行認知への直接効果の方が強い。全体として期待認知が重きをなすのが特徴である。青年期前期では対象切替を実行するか否かは、周囲からの期待次第であると考えられる。そこからは、青年前期では周囲の期待に応えることが強く重視されていることが読み取れる。それがより明瞭に現れるのが自己切替であり、抵抗感の高低に関わらず、期待認知の高低が自己切替の実行に強く影響していることが窺える。適応性は個体と環境の関数として考えるべきであるが (福島, 1989)、総じて青年前期における状況に応じた切替は、環境調整よりも環境適合に偏った用いられ方をしていると考えられる。

生涯発達の中の青年期の友人関係

本研究の結果は、希薄化論が論じるように発達遅滞の表れとみなすのは妥当ではないこと、選択化論が論じるように時代性・世代性の観点のみで解釈するのは妥当ではないことを示している。少なくとも、両言説が共に注目した対人行動、状況に応じた切替に関しては、「現代青年」の対人行動ではなく、むしろ成人に適合した対人行動であると言える。同時に本研究の結果は、同じ対人行動であっても、その心理的機序は発達段階によって異なることを示した。発達論としてはごく当たり前の結論であるが、それが示されて来なかったことが、適切な青年理解と青年支援を阻害して来たと考えられる。

既に見たように、老年期・成人期の目から見れば、青年の対象切替は明解な機序の見えない不可解な行動に見える。自己切替は場当たりので主体性に欠ける行動に見えるであろう。しかしそれは彼らが児童期を遅滞させたり退行したりしているのではなく、Piaget (1956 浜田訳 1983) に做えば、成人期への移行に向けた準備期に入ったが故の不慣れさであると捉えた方が妥当ではないか。定型的な生涯発達においては、青年期に自己の問い直しを経験することによって、他者との情緒的・依存的融合状態を脱し、相互の独自性に気づいた上で理解・共感できると考えるようになっていく (落合, 1974)。そうし

て「私と他者」が再編されるからこそ、相互の同一性を融合させ、犠牲や妥協を要求することもある提携関係に自己を投入することができるようになり、「私たち」として生殖性の発達に直面することができるようになっていく (Erikson, 1982)。

勿論、誰もが滞りなく定型発達を遂げる訳ではなく、他人への無関心・人間不信に特徴づけられるC型類型(落合, 1974)にとどまる場合もあろう。しかしその場合には、それを児童期の遅滞と判断したり、従来にない新しい形と判断したりする前に、前成人期・成人期の危機である、親密性対孤立、生殖性対停滞の失調傾向である可能性を考慮すべきではないか。

本研究の限界と今後の課題

第1に、本研究が取り上げた対人行動「状況に応じた切替」は、先述の通り希薄化論と選択化論が共通して注目した部分に焦点したものであり、「現代青年の友人関係」とされてきた特徴全般を網羅したものではない。防衛的(落合・佐藤, 1996)、軽躁的(岡田, 2016)等の特徴を論じる場合は別途検討する必要がある⁸。

第2に、本研究では年齢区分による差を発達差として解釈したが、時代性・世代性との交絡または交互作用も想定し得る。その検討のためには、中・長期的なコホート調査が必要である。

第3に、本研究では行動と、行動に先立つ心理的機序に焦点をおいた。そこに発達差と考える年齢差がみられたからには、行動の効果に関しても発達差が予想される。その検討も、適切な青年理解と青年支援のために必要であろう。

利益相反

本論文について、開示すべき利益相反事項はない。

引用文献

- 浅野智彦 (2015). 若者とは誰か—アイデンティティの30年【増補新版】河出ブックス
- Carstensen, L. L. (1995). Evidence for a life-span theory of socioemotional selectivity. *Current Directions in Psychological Science*, 4 (5), 151-156.
- Cohen, J. (1992). A power primer. *Psychological Bulletin*, 112, 155-159.
- Crick, N. R., & Dodge, K. A. (1994). A review and reformulation of social information-processing mechanisms in children's social adjustment. *Psychological Bulletin*, 115, 74-101.
- Elkind, D. (2001). *The hurried child: Growing up too fast too soon*. (3rd ed.) New York: Perseus Books.
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle*.

- New Haven: International University Press.
- Erikson, E. H. (1982). *The life cycle completed: A review*. New York: W. W. Norton & Company.
- Faul, F., Erdfelder, E., Lang, A-G., & Buchner, A. (2007). G*Power 3: A flexible statistical power analysis program for the social, behavioral, and biomedical sciences. *Behavior Research Methods*, 39, 175-191.
- 福島章 (1989). 性格と適応 福島章 (編) 性格心理学講座第3巻—適応と不適応 (pp.3-37) 金子書房
- Furman, W., Simon, V. A., Shaffer, L., & Bouchey, H. A. (2002). Adolescents' working models and styles for relationships with parents, friends, and romantic partners. *Child Development*, 73, 241-255.
- Hartup, W. W., & Stevens, N. (1997). Friendships and adaptation in the life course. *Psychological Bulletin*, 121, 355-370.
- 本田周二 (2018). 世代間比較による友人関係の特徴について 人間生活文化研究 (大妻女子大学人間生活文化研究所), 28, 126-130.
- 岩田考 (2006). 多元化する自己のコミュニケーション—動物化とコミュニケーション・サバイバル 岩田考・羽淵一代・菊池裕生・苦米地伸 (編) 若者たちのコミュニケーション・サバイバル—親密さのゆくえ (pp.3-16) 恒星社厚生閣
- 岩田考 (2014). ケータイは友人関係を変えたのか—震災による関係の〈縮小〉と〈柔軟な関係〉の広がり 松田美佐・土橋臣吾・辻泉 (編) ケータイの2000年代—成熟するモバイル社会 (pp.171-200) 東京大学出版会
- Lang, F. R., & Carstensen, L. L. (2001). Time counts: Future time perspective, goal, and social relationships. *Psychology and Aging*, 17 (1), 125-139.
- 宮下一博 (1995). 青年期の同世代関係 落合良行・楠見孝 (編) 自己への問い直し—青年期 (pp.155-184) 金子書房
- 西平直喜 (1965). 友情・恋愛 大日本図書
- 落合良行 (1974). 現代青年における孤独感の構造 (I) 教育心理学研究, 22, 162-170.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達の变化 教育心理学研究, 44, 55-65.
- 大谷宗啓 (2007). 高校生・大学生の友人関係における状況に応じた切替—心理的ストレス反応との関連にも注目して 教育心理学研究, 55, 480-490.
- 大谷宗啓 (2013). 大学生の同性友人関係における状況に応じた切替—社会的スキルとしての効果性と教育上の課題 大阪電気通信大学人間科学研究, 15, 79-93.

- 大谷宗啓 (2019). 大学生にとって友人関係における状況に応じた切替とはどのような体験なのか—自由記述と半構造化面接によるボトムアップアプローチ 滋賀大学教育学部紀要, 68, 99-113.
- 大谷宗啓 (2020). 友人関係における大学生と成人の比較—1960 年以前出生の成人を比較対象として 滋賀大学教育学部紀要, 69, 189-200.
- 岡田 努 (1992). 友人とかかわる 松井 豊 (編) 対人心理学の最前線 (pp.22-29) サイエンス社
- 岡田 努 (2016). 青年期の友人関係における現代性とは何か 発達心理学研究, 27, 346-356.
- 大野 久 (2010). 青年期の恋愛の発達 大野 久 (編著) エピソードでつかむ青年心理学 (pp.77-109) ミネルヴァ書房
- Piaget, J. (1956). Les stades du développement intellectuel de l'enfant et l'adolescent. *Le problème des stades en psychologie de l'enfant*. Paris: P. U. F. (ピアジェ, J. 浜田寿美男 (訳) 子どもおよび青年の知的発達の段階 浜田寿美男 (訳編) (1983). ワロン/身体・自我・社会—子どものうけとる世界と子どもの働きかける世界 (pp.245-258) ミネルヴァ書房)
- 清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD—機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- 丹野宏明 (2019). 友人関係 松井 豊 (監修) 畑中美徳・宇井美代子・高橋尚也 (編) 対人関係を読み解く心理学—データ化が照らし出す社会現象 (pp.1-21) サイエンス社
- 鎌 幹八郎 (1986). 「エリクソン・E・H」 村井潤一 (編) <別冊発達 4> 発達の理論をきずく (pp.193-215) ミネルヴァ書房
- 辻 泉 (2016). 友人関係の変容—流動化社会の「理想と現実」 藤村正之・浅野智彦・羽淵一代 (編) 現代若者の幸福—不安感社会を生きる (pp.71-96) 恒星社厚生閣
- Waterman, A. S. (1993). Developmental perspective on identity formation: From adolescence to adulthood. In J. E. Marcia, A. S. Waterman, D. R. Matterson, S. L. Archer, & Orlofsky. (Eds), *Ego identity: A handbook for psychological research*. New York: Springer-Verlag.

礼申し上げます。

脚 注

- 1 岩田 (2014) では 10 代・20 代…と全て暦年齢で区分されているが、発達段階および生活環境が大きく異なる中高生・大学生・社会人を混在させるのは避けるべきと判断した。なお、同じ青年前期に属し生活環境も似通った中学生・高校生間にも差異が指摘されているが (落合・佐藤, 1996), 本研究では人数と分析方法の兼ね合いから区分できなかった。中学生は 24 名, 高校生は 25 名とほぼ同数であった。
- 2 本研究は 1 時点の横断調査であるため, 時代性・世代性の有無は検討しない。検討するのは, 時代性・世代性の観点のみで解釈することが妥当か否かである。
- 3 大谷 (2000) では「実行したかった・したいだろう」への肯定が「希望」として指標化されているが, それが青年の「できればたくない」という抵抗感を測定する逆転項目となり得るかには疑問がある。本研究ではより直接的に抵抗感そのものを問うた。
- 4 指標間の順序関係は Crick, & Dodge (1994, Figure 2) をもとに設定した。Crick, & Dodge (1994) のモデルは循環的な情報処理過程を扱うものであり, 影響過程としては逆の順序関係もあり得る。なお本研究は 1 時点の横断調査であり, 仮説モデルおよびパス解析結果は予測モデルであって因果モデルではない。
- 5 学生と社会人が混在し対象が不明確となるのを避けるために除外した。
- 6 個人内ではなく個人間の分析結果に基づく考察であるため確言はできない。以降も同じである。
- 7 恋愛関係についての指摘ではあるが, 青年期に限れば, 友人関係と恋愛関係は似通っている (Furman, Simon, Shaffer, & Bouchev, 2002; 西平, 1965)。
- 8 一部の検討は大谷 (2020) で試みられている。

付 記

本研究は 2019 年度滋賀大学若手研究支援助成を受けた「友人関係の年齢階層間比較—青年期における心理社会的早熟の可能性の検討—」(研究代表者: 大谷宗啓)の結果の一部である。ご助成に深く感謝申し上げます。そして, 調査にご協力いただきました皆様に, 心より御